

戊辰戦争白河口の戦い余話

伝承 阿部内膳とみき姫

十六ささげ隊

戊辰戦争時、棚倉藩に「十六ささげ」と呼ばれた部隊がありました。

ささげ豆を想像させるこの部隊を率いたのは、慶応四年二月、藩主阿部正静に棚倉から白河への復封の沙汰があったとき、城の受け取り式に立ち会った阿部内膳です。内膳の父正脩（まさなか）も、忍（おし）から白河へ移封の際に白河城の受け取り役を果たした、棚倉藩主阿部家の一門です。

隊の名前は「誠心隊」。家禄はすべて返上し、一日玄米五合のみを受け取ることにして宇迦神社に集まりました。西洋嫌いの藩士たちが隊長阿部内膳の指揮下、鉄砲組八人、弓組七人で、和装での別手隊を編成して出陣したといえます。当時はすでに洋式の軍装が一般的になっていましたが、頑としてこれを拒み先祖伝来の甲冑に身を固めて戦いました。

五月一日の戦い

「白河口の戦い」の最大の激戦日だった五月一日の戦いでは、家老平田弾右衛門の指揮のもと、内膳は棚倉藩隊長として白河城下の桜町関門を守り薩摩藩四番隊と戦います。しかし優秀な火力と戦法の前に、古来の戦法では太刀打ちできずに敵の銃弾に斃れました。

十六ささげ隊士は、隊長を白河合戦で失ったあとも結束してよく戦い、同じように黒装束で奇襲戦法を用いた仙台藩の細谷十太夫が率いる「からす組」とともに、『仙台からすと十六ささげ なけりゃ官軍高枕』と謳われるほどに敵兵から怖れられました。

阿部様落人

さて、白河市東釜子畑中集落に、竹林に囲まれ荘厳な雰囲気漂わせる一郭があります。周囲と隔絶された感があるこの場所にはかつて、みき姫と呼ばれる方が暮らしていました。

この方こそ阿部内膳の娘で、棚倉城に戦禍が迫る中、みき姫と母君はそれぞれに短剣を与えられて、深仁井田村（白河市東釜子深仁井田）の国津神社に逃げ延びました。

白河口の戦闘盛んな中、みき姫たちのもとに「内膳様が合戦坂で重傷を負ったので、敵に見つからないように木の枝や葉っぱを被せ、十本の鯉節を置いてきた。戦争が終わったらすぐに行かれるように」と二人の家来がやってきて告げました。戦いが終わり教えられた場所に行ってみると、内膳は虫の息で鯉節が一本だけ残っていたそうです。

時代は明治に移り、この神社の参道入口に住む小林家に赤ちゃんが生まれ、おじいさんに負われて毎日やって来るようになりました。この赤ちゃんをみき姫は我が子のように可愛がり、小林家との交流が続きます。やがて、大きくなった赤ちゃんに嫁ぐ日が来ると、みき姫は「私もついて行く」と言って、阿部稲荷大明神の祠とともに嫁ぎ先橋本家の離れに移り住みました。

その後、阿部家の遺録を受け継いだみき姫は、時折たずねてくる甥を心待ちにしながらひっそりと暮らしました。

大正九年に七十五歳で亡くなるまで、生涯独身のまま誇り高く生きて、鬱蒼とした集落の共同墓地のな

か、橋本家の墓域にあの赤ちゃんだったトリさんとならんで眠っています。

阿部内膳の遺体は、常宣寺（白河市向新蔵）に葬られ、戊辰戦争終了後に明治政府が旧藩の戦争責任者を訴追したとき、棚倉藩はすでに死亡していた内膳の名前を届け出ました。どの藩もそうであったように、藩主を首謀者にするわけにはいかなかったのです。

内膳が反逆首謀者に擬せられて、絶家になるという混乱の中、みき姫も時代の激動に流されてしまったのでしょうか。

取材協力（敬称略）

仁平絹江 橋本俊一 橋本ソノ

令和 4 年 3月

安司弘子

（全国歴史研究会会員）